■■■■■

アニメ・刀語

第1話『絶刀・鉋』

第4稿

脚本／上江洲誠

作成／090202

決定稿

【登場人物】

鑢七花(やすりしちか)

とがめ

鑢七実（やすりななみ）

真庭蝙蝠（まにわこうもり）

鑢六枝（やすりむつえ）

飛騨鷹比等（ひだたかひと）

ナレーション（女性をイメージ）

——他

□黒味

T「時は戦国、乱世の時代――。刀を持たぬ最強の剣法があった」
（※『剣法』の字を強調）
炎に包まれる。

□奥州・飛騨鷹比等の城・外観

燃えている城。
T「奥州　飛騨城」

□同・廊下

炎の中。
悠然と突き進む剣法家――鑢六枝！
立ちふさがる兵士たちを、徒手空拳で倒していく。
天守閣への階段を駆け上がる。

□同・天守閣

（※このシーンは＃10で改めて描写されます。＃１では幾分かイメージ優先で）
飛騨の兵をはね飛ばしながら、六枝上がってくる。
見据え頭首――飛騨鷹比等。
六枝「反逆者、飛騨鷹比等……」
鷹比等「虚刀流の……」
見合う……。
静かに刀を抜く鷹比等。己の死を悟っている。
鷹比等「（自分に）ふうん、そうか……僕はこういう風に失敗するのか……」
六枝「……」

×　×　×

その光景を隠れて見ている目（児童とがめ）。

×　×　×

六枝、鷹比等の剣を体術でかわし、刀を叩き折る。
鷹比等「……今となっては、詮無きことだ……」
六枝に背を向ける鷹比等。

　手刀を振りかざす六枝。
鷹比等「×、×、×……（容赦姫）」

　　×　　×　　×

児童とがめ「！」
　とがめの眼前に鷹比等の首が舞う。
　凄惨な光景が目に焼き付く……。

　　×　　×　　×

　暗転――。
船頭の声「お客さん――」

□海・船上【朝】

　かすかに朝日が昇る頃合い。
船頭「――見えてきましたよ」
とがめ「ん？……」
　と、ぼんやり考え事をしていたとがめが針路を見やる。
　そこは、霧がかった海上。とがめと船頭だけを乗せた小さな漕ぎ船の上だった。
　神妙な面持ちのとがめ。
とがめ「……」
　霧の向こうに島――不承島が見える。
船頭「あんな無人島に何のご用なんですかねえ？」
　返事をしないとがめ。針路を見据えている。
とがめ「……」
とがめM「無人島などではない。あれは大乱の英雄の、流刑の地……」
　船は島に近づいていく。

　■タイトル

□不承島【朝】

　まだ霧がかった早朝。
　島の風景を見せながら。
N「大乱後の世を治めた将軍家鳴は、英雄・鑢六枝の剣法を恐れ、幼い子供たちをも一緒に、この無人島へ幽閉しました。――それから二十年、誰もこの地を訪れることはありませんでした……」

□同・小屋【朝】

木々を抜けた先に小屋がある。

巨大な桶を担ぐ七花（半裸）。気怠い様子。

七花「……っと。あー……面倒だな……」

小屋の戸が開き、七実（襦袢に羽織）が声を掛ける。

七実「何をしているの？　七花」

七花「姉ちゃん……。ああ、瓶（かめ）の水が無くなりそうだったから……」

薄着の七実を見て。

七花「そんな格好で出てくるなよ。寒いだろ」

七実「大丈夫。少しぐらいなら気持ちいいぐらいよ。——それより、今日の家事当番は私だったはずだけど」

七花は、病弱な姉を気遣っている。

七花「そうだっけ？」

溜息をつく七実。

七実「……私のことを壊れ物みたいに扱うのはやめてって、言ってるでしょう」

七花「そんなつもりはないよ……。いいだろ？　これも修行の一環だ」

厳しく言う七実。

七実「余計な気まわしを教えた覚えはなくってよ。けほっ（咳）」

七花「ほら、家に入ってろって」

七実「修行なんてもう……何の意味もないじゃない」

言葉を返せない七花。

七花「姉ちゃん……」

七実「あなたの代で最後になる流派を保つことに、どんな意味があるというの？」

言いにくそうな七花。

七花「うーん、意味なんて、考えてないけど……」

七実「ねえ七花……父さんが死んで、もう一年にもなるのよ。そろそろ、いいんじゃないの？」

七花「そんな言い方はないだろ？　ほら、昨

日なんかさ、新しい必殺技とか考えたんだぜ！　すっげー格好いい――」
七花を見据える七実。
七実「……」
消沈する七花。
七花「――やつ……」
七実「元々、島流しの憂き目に合ったのは父さん一人なんだし……。私は無理だけれど、あなた一人なら、船を作って……」
七花、強く遮る。
七花「馬鹿なことを言わないでくれよ！」
七実「……。起き抜けにするような話じゃなかったわね」
七花「……」
七実「朝御飯の準備はしておくから、早く行ってらっしゃい」
七花「ああ……」
七実、戻り際に。
七実「新しい必殺技というのは……そうね、あとで見てあげるわ」
立ちすくむ七花。自分の掌を見る……。
七花Ｍ「……」

□同・山中【朝】
……を進む七花。桶を背負っている。
七花Ｍ「――島を出るか……。そりゃあ、いつかは出る話だと思ってたけどさ……」
×　　×　　×
――回想・数年前
父に剣法の手ほどきを受けている七花。
七花Ｍ「これが唯一、親父から受け継いだ物だから――」
×　　×　　×
――回想・一年前
父の墓前（ただの石）に立つ七花と七実。
七花Ｍ「――大事に出来るうちは大事にしておきたいんだ……。俺には他に何もないから……」
×　　×　　×
山中を進む七花。

七花　ふと……。
七花「？」
　雪駄の足跡があることに気づく。
　覗き込む。
七花Ｍ「はぁ、面倒だな……。親父がいたら
　一発で斬り捨て御免なんだろうが……」

□同・水汲み場
　……にたどり着いたとがめ。しばし立ち
　竦む。
　湧き水に気付く。
　飲もうと口を近づけた矢先……。
七花の声「――おい」
とがめ「？」
　とがめ、驚いた風もなく振り返る。
　その凛とした美貌。
とがめ「……」
　無感動な七花。
七花「本土の人間か？」
　まだ口を開かないとがめ。
とがめ「……」
七花「始めて見た」
　七花は、とがめが帯びでいる刀を見る。
七花「刀か……それも始めて見た」
とがめ「……」
　面倒臭そうな七花。
七花「別によそ者だろうが誰だろうが、入っ
　て来るのは構わないんだけどよ……」
　台詞を思い出す七花。
七花「えーと……この島への刃物の持ち込み
　は堅く禁じられている」
とがめ「……そうか」
七花「そうだ」
とがめ「それは失礼をした。知らなかったも
　のでな。許しておけ」
七花「まあ、俺が決めた規則じゃないけどさ」
　動じていないとがめ。
七花「あんた、どうやってこの島に来た？」
とがめ「船で来たに決まっておる」
七花「特に俺が知りたいわけじゃないんだけ

どな。こういうときはそうしろって、言われてきたからな。次は……」
とがめ「『何をしにきた？』だろ？」
七花「そうだ、何をしにきた？」
とがめ「ふむ……。この島に、虚刀流六代目当主、鑢六枝どのがおると聞いたのだが、そなた知らぬか？」
七花「親父なら死んだよ。一年前」
とがめ「…………………そうか」

×　　×　　×

岩に腰掛けいるとがめ。七花の様子を見ている。
七花、桶に水を汲みながら。
七花「今は俺が当主だ。虚刀流七代目当主、鑢七花」
とがめ「ああ。──いや、これは愚問であった。二十年も前の話になるゆえな、そういうこともあるとは思っておった」
桶を担ぐ七花を吟味する。その引き締まった肉体。
とがめM「なるほど、いい身体をしておる」
顔を見る。
とがめM「ふむ、見てくれもまあまあだ」
とがめ「及第点と言ったところだな」
七花「ん、何の話だ？」
とがめ「ああ、こっちの話だ」
七花「親父に用事だったみたいだけど、悪いな」
とがめ「その通りだが、少し違う。用があったのは、虚刀流当主にだ」
七花「？」
とがめ「ゆえに、六枝どのへの用事は今、そなたへの用事へと変わったのだ」
とがめ、ひょいと岩から降り、起立する。
とがめ「七花、名乗りが遅れてしまったな。私はとがめという」
七花「とがめ……？　変な名前……」
一瞬、むっとなるとがめ。
とがめ「（咳払い）幕府の軍所総監督、奇策士を生業としておる。──まずは虚刀流、

試させてもらうとしよう！」

　抜刀するとがめ。

とがめ「富岳三十六刀工が一人、壬生傘麻呂の初期作品だ――」

　名刀の煌めき。

七花「試す……？」

とがめ「言葉通りの意味だ。参る！」

　とがめの突進を見据える七花。

とがめ「きえーいっ！」

　小石に躓いて転ぶとがめ。

　顔面から突っ伏す。

とがめ「ぎゃふんっ！」

　構えたままの七花。

七花「……」

　つっぷしたまま、立ち上がらないとがめ。

とがめ「……」

N「虚刀流七代目当主鑢七花、軍所総監督・奇策士とがめ……数奇な運命を共にすることになる二人が出会ったのは、まだ『ぎゃふん』という言葉が古くなかった時代、睦月中旬のことでした」

□同・小屋・門前【朝】

七花「ただいま」

　七花が背負った桶の中には、気絶したとがめが入っている。

　少しだけ、眉をひそめる七実。

七実「む……」

□同・内【朝】

　眼を覚ましたばかりのとがめ（羽織は脱がされており、襦袢のみ）。布団に寝かされていたのだ、

　七実が白湯を渡す。

七実「奇策士のとがめさん……でしたっけ？　なにぶん、この島にいらした始めてのお客様ですので、もてなす作法を心得てはいませんが……」

とがめ「いや、こちらこそ、突然の来訪、申し訳ない」

　気にせず、囲炉裏で食事を続けている七花。
七実「鑢六枝の娘、七実と申します。——父を訪ねて来られたということですが、父とはどういったゆかりがおありなのですか？」
とがめ「直接お会いしたことはない。ゆかりといえるほどの繋がりもない」
七実「ありませんか」
とがめ「ない。——ただの飛び込みと考えてもらって結構だ、七実」
七実「刀は預からせてもらっています。弟から聞いたと思いますが、この島は刃物の持ち込み・使用を禁じていますから」
　部屋の隅に、とがめの刀が置かれている。
とがめ「ふむ、虚刀流ゆえに——かな？」
七実「……」
とがめＭ「虚しい刀の流れと書いて、虚刀流」
　気にせず食事をしている七花。
とがめＭ「刀を用いない闇の流派——」

×　　　×　　　×

——戦場
　徒手空拳で闘う六枝のイメージ。
とがめの声「その技術がわずかに日の目を見たのは、初代当主鑢一根と、六代目当主鑢六枝の代だけ。——戦国と大乱。いくさ場の混乱との中でのみ振るわれる、最強の殺人剣術……」

×　　　×　　　×

　元の羽織に着替えるとがめ。
　着衣しながら、七花を見る。
とがめＭ「……あの男が七代目……」
　厳しく聞く七実。
七実「とがめさん、あなたはあの刀で弟を斬りつけようとしたとか？」
とがめ「虚刀流の神髄を手っ取り早く見せてもらおうと思ってな。しかし慣れぬことはせんものだ。私は奇策士であって、剣士ではない」
　七花、食事を続けながら。
七花「その割には、抜刀の様だけは、見事な

ものだったけどな」
とがめ「ふっ、あれだけは練習してきたのだ」
　呆れる兄姉。
七花・七実Ｍ「もっと最後まで練習してこい……」
七実「乱暴な方法ですね……あまり感心できません」
とがめ「そう思われても仕方がないが、こちらにも思惑があった。鑢六枝の名は聞こえていたが、わたしはその顔を知らなかったからな」
　囲炉裏の側に座るとがめ。
とがめ「人違いが起きては大変だ。虚刀流の技を示してもらえるようならば、それが何よりの名札代わりだ」
七実「六枝が七花でも、それは同じ……ですか。なるほど。――では、もう一度、試してみますか？」
　冷徹に怒っている七実。
七実「小岩に足を取られたことは幸運だったと思ってください。もしも刀身が七花の肉体に届いていたなら……額にこぶ程度では済みませんでしたよ」
　息をのむとがめ。
とがめ「……否。その言葉をもって、虚刀流の名札と、受け取っておくとしよう。私もまだ死ぬわけにはいかん」
　土間に座る七実。
七実「左様ですか。では、お話を伺いましょう」
とがめ「うむ……」
　とがめ、七実にではなく、七花に問う。
とがめ「そなた、天下が欲しくないか？」
七花「いらん」
とがめ「（得意げ）そうであろう、それはこの世に生を受けたからには当然のことだ。野心の強さを恥じることはない。かの反逆者達の心意気そのものまでを、誰が否定できよう。突き詰めてみれば今の将軍家も、元々は下克上で成り上がった家系ではない

か。ならば人が天下布武を志すに躊躇する理由はない……って、いらんのかい！」
七花「ああ、お前の話はよくわからん」
とがめM「わ……わからんだと!?」
七実「とがめさん、なにぶん、わたし達は島育ちの世間知らずです。遠回しな表現は、通じぬものと思っていただいた方がよいかと」
とがめ「ん……そうか。ああ、しかしそうなると、できれば七実には、席を外してもらいたいのだが……」
七花「それは無理な相談だ」
とがめ「？」
七花「理由は二つある。一つは、虚刀流は血族の技だからだ。たとえ親父が生きていたって、俺と姉ちゃんをこの場に同席させただろう。そしてもう一つ……俺はものを考えるのが苦手だ。難しい話は理解できない」
とがめ「そうか、ものを考えるのが苦手か……」
　　諦めたとがめ。
とがめ「では、他言無用という約束で、話をさせてもらうことにしよう。――四季崎記紀という刀鍛冶を知っておるな？」
七花「知らん」
とがめ「（得意げ）そうであろう、このような離れ小島に住んでおったところで、剣客を名乗る以上はその名を知らぬというわけにはゆくまい。刀を使わぬ虚刀流と言えどそれは同じ……いや、刀を使わぬ虚刀流にとっては、四季崎は天敵のような存在になるのか。初代だろうが七代目だろうが、当主としてその思いは同じということだな……って、知らんのかい！」
七花「ああ、大層なやつだということはわかった」
七実「四季崎記紀……たしか、戦国時代の有名な刀工でしたか？」
　　拍子抜けのとがめ。
とがめ「……その程度の認識しかないのか？」

七実「虚刀流の開祖と浅からぬ因縁があったということだけは聞いていますが……」
呆れたとがめ、説明を始める。
とがめ「（溜息）はぁ……。四季崎はどの流派にも属さない、孤独にして孤高、異端中の異端の刀鍛冶。しかし、彼こそが戦国を最も支配した刀鍛冶と言われおる」
七実「戦国を支配？　言葉の意味がわかりませんが……」
とがめ「彼はどこの国、どこの家にも属さず、己が打った刀を、全国に節操なくばらまいた。総計二十五カ国に……合計、千本の刀をだ」
七花「千本……多いな」
七実「少ないですね」
とがめ「……」
姉の言葉に従う七花。
七花「……少ないの方で」
とがめ「四季崎の刀が多い国ほど、優勢に戦闘を進めた。それを、戦国を支配したと言わずして何と言おう？」
七実「それは逆なのでは……。戦闘を優位に進められるほど国力の大きな国だからこそ、四季崎の刀を多く集めることが出来たのだと」
とがめ「確かに、現実的にはそう見るべきだろう。しかし、少なくともそういう幻想が生じたことも、また確かだ。――百五十年前。その幻想に取り憑かれた旧将軍が天下統一を成し遂げた際、過半数、五百七本の刀があったという」
七花「大人げねえ……」
とがめ「その後、四季崎の刀を盲信した旧将軍が行ったまつりごとが……かの悪法、刀狩りだ」
七花「大仏作りのためとかどうとかってやつ？」
とがめ「それは表向きの話だ」
七実「裏の目的は剣客狩りだったと聞いています」

とがめ「いや、真の目的は……」

七実「四季崎の刀の蒐集にあった――と言いたいのですか？」

とがめ「その通りだ」

七実「なんとも呆れた話ですね」

とがめ「とは言え、それで、十万本を越える刀が、旧将軍の下に集まったのだ」

七花「十万本……少ないな」

七実「多いですね」

とがめ「……」

　姉の言い分に従う七花。

七花「……多いの方で。――で、その四季崎の刀が集まったってことか……」

とがめ「いや、最終的に、旧将軍は諦めたのだ」

七花「は？」

とがめ「千本全て、所在までは突き止めることができていた……所在まではな」

七花「だったら蒐集出来ただろ？　将軍の権力があったんだからさ」

とがめ「そうは問屋がおろさんのだよ、この話は。――千本の内、最後に残った十二本というのが、どうしようもない際物でな。九百八十八本は、そのたった十二本を制作するための習作だったというのが、現在の考え方だ」

七実「十二本のための千本……」

とがめ「いい狂いっぷりであろう？」

×　×　×

　かつての所持者たちであったであろう剣士たちと刀のイメージ。

とがめの声「鉋、鈍、鍛、針、鎧、鎚、鏢、釵、鋸、銓、鍍、銃……それらの凶悪さは、よく聞こえた名刀妖刀などでは比較にならない――」

　幕府軍が剣士に破れるイメージ。

とがめの声「――旧将軍の命で蒐集に出向いた軍隊が、ただの一本の刀に全滅させられたという記録がある。そして、それが三年の内に、十二回続いたのだ……」

×　　×　　×

七実「初めて聞く話です……」
とがめ「そうであろうな、己の恥を公式に残すわけもない。――旧将軍の天下は、たった十二本の刀の前に一代で潰えたのだ」
　とがめ、紙片を七花に渡す。
とがめ「そこで、わたしがこの島にやってきた用件だ。――虚刀流当主、鑢七花。伝説の刀鍛冶四季崎記紀が最後の十二本、それを蒐集する命を、そなたに与えたい」
七花「……天下が欲しくないかって、そういう意味だったのか……」
とがめ「いかにも。天下を統べらんほどの力を追う旅だ。別に本当にそなたが天下人になるわけではない」
七花「今の幕府は長いこと盤石なんだろ？なんで今さらそんな刀に執着するんだよ？」
とがめ「む……」
七実「ええ、先の大乱ですら、力任せに押さえつけることができるほどに強大です」
　呟くとがめ（※これは過去を思って、恨みと悲しみ）。
とがめ「――そう……力任せにな」
七実「？」
　取り繕うとがめ。
とがめ「ああ、いや。――その大乱が問題だったのだ。そう、尾張幕府もはや百五十年……今となっては、戦国時代を本当の意味で知っている者はいない。四季崎の刀も、今やお守り程度にしか考えられてはいなかったろう……が、考えても見るがよい。もしも先の大乱の首謀者がこぞって、十二本の刀の持ち主だったなら……現幕府とてどうなっていたものか」
七実「幕府は反乱を恐れている……」
七花「念には念をってことか……」
とがめ「平たく言えばそういうことだ」
七実「それで刀の所在は……？」
とがめ「わかっているものは……因幡、出雲、周防、薩摩、蝦夷、土佐……」

× × ×

小屋を覗いている目――真庭蝙蝠だ。話を伺っている。

× × ×

とがめ「――残りは調査中」
七実「半分しかわかっていないとは、先の長い話ですね」
とがめ「半分もわかっていると言ってくれ」
　考えていた七花。
七花「うーん……」
とがめ「なんだ？」
七花「反乱が怖いんだったら、変に今の持ち主を刺激しないほうがいいんじゃないか？」
とがめ「上手くやれ――というのが幕府からのお達しだ」
七花「どう上手くやれっていうんだよ？」
　とがめ、自分を指して。
とがめ「そのために、奇策士がいる！　わたしのように裏で動く人間がな！」
七実「……あの……時機を見ておたずねしようと思っていたのですが……その、奇策士って、何なのですか？」
　とがめ、自信たっぷりに。
とがめ「正確には、尾張幕府家鳴将軍直轄預奉所――軍所・総監督、奇策士とがめだ」
七実「う……えーと、この二十年の間に新しく出来た幕府の役職か何かで……？」
とがめ「いや、これはわたしが勝手に名乗っているだけだ」
七位・七花M「自称かよ！」
とがめ「策を練るのが策士なら、奇策を練るのが奇策士だ。普通ではない命令は、普通ではないわたしのところに下るのだ！」
　呆れる姉弟。
とがめ「そんなわけで、私に協力してはくれまいか？」
七花「……あんたが幕府の人間だって言うんなら、べつに虚刀流に頼らなくても、いくらでも……」
とがめ「言わんとしていることはわかる。―

—金で動く人間は駄目だ……」
七花「は？」
とがめ「蒐集を依頼した忍者が……裏切ったのだ」
七実「え、忍者なのにですか？」
とがめ「その驚きはわかるぞ。そんなことをすれば長年築き上げてきた信用も、がた落ちだからな。しかし、それでも奴らは刀を持ったまま姿を消したのだ。忍軍丸ごと、里もろともだ」
七実「とんでもないことを……」
とがめ「完成形変体刀は、一本で国が買える価値を持つ高級芸術品だ。金で動く人間はだめだ！」
七実「（呆れ）……」
七花「なるほど。じゃあ、名誉はどうだ？剣士はかくあるべきだと、俺は親父に教えられたぞ？」
とがめ「名誉か……。　剣士も駄目だ……」
七花「ん？」
とがめ「幕府が知る中で最も強く、最も忠義に厚い剣客を一人選んだ。名を錆白兵といってな、最も手に入れるのが困難だろうと思われた『薄刀・針』を、貴奴は驚くべき短時間で手に入れた……」
七花「おお」
とがめ「手に入れて……失踪したのだ……」
七花「おい」
とがめ「毒が強過ぎるのだ。名誉で動く剣士だからこそ、四季崎の刀を所持する名誉からは逃れられなかったのであろう……」
七花「（呆れ）忍者に剣士と……より強いやつの所に刀が移ったわけだ……。あんたの信用がたおちだな」
とがめ「そうなのだ。　何とかならんものか!?」
七花「知るかよ！」
七実「それで虚刀流ですか……。　金で動かず、刀を使わない剣士であること……」
とがめ「そうだ。虚刀流当主鑢七花！　尾張幕府千年の歴史のために、研鑽したその技

術を、使ってはくれぬか？」
　再び紙片を七花に渡そうとする。
　受け取らない七花。
七花「話はわかったけどよ……それはあんたには必要って話で、俺はとくに刀ってやっにも感心がねえ」
とがめ「怖いのか？」
七花「そりゃ怖いよ？　けれども、それ以上に面倒だ。わざわざ海を渡って出向くほどじゃないよ」
とがめ「ふっ……」
七花「？」
とがめ「その答え、この私が予想しなかったと思うか？　幾度となく煮え湯を飲まされたこの奇策士が、そなたごときを動かすに足る理由も持たずに、のこのことこの島にやって来たと思ったか？」
七実「煮え湯を飲んできたんですね……」
七花「……なんかあんのかよ？　理由……」
　自信たっぷりのとがめ。
とがめ「ああ。金で動く人間は駄目だ。名誉で動く人間も駄目だった。ならば残された理由はたった一つ」
　言葉を待つ姉弟。
とがめ「……愛だ」
七花「あ……愛!?」
とがめ「愛で動く人間は、信用出来る。――鑢七花……わたしに惚れていいぞ」
　言葉を無くす姉弟。
　……その瞬間、敵の砲撃！
　ドッ――と破裂する一瞬の間――。
七実「！」
　最初に反応した七実がとがめと七花を突き飛ばす。それが二人を救った。
　――カーン、と破裂。
　小屋の壁を一手で破壊したそれは、大量の手裏剣だった。
とがめ「手裏剣……？」
　怒る七花。
七花「ふざけんな！　親父が建てた家だぞ！」

外へ駆け出す。
逃げ出す襲撃者。
七花は既に彼方まで駆けている。
七実「あ、七花！」
七実「全く、なんて短絡的な……」
とがめ「いや、あれで正解だ。飛び道具に関しては即断即決しかない。あの小僧……なかなか、戦闘の機微というものを心得ているようではないか」
七実「まあ、本能で動いていますからね……」
とがめ、壁に刺さっている手裏剣を見る。
とがめ「忍者……真庭忍軍……だな」

× × ×

敵を追って、森を駆ける七花。

× × ×

七実「真庭……？」
とがめ「（怒り）四季崎の刀の価値を知った途端、今までの付き合いも忘れて、裏切ったやつらだ！」
七実「ああ、金では駄目だとなんとかの……。——何人でしょうか？」
とがめ「一人であろうな」

× × ×

木々を飛びながら、逃げる影。
追う七花。

× × ×

とがめ「真庭のしのびは集団行動を嫌う。……否、集団行動をする意味のない連中揃いだ」

× × ×

逃げる影。
追う七花。
とがめ「わからんのは、どうして奴らがここに……ということだ、尾行されるわけなどないし、行き先は誰にも告げていないのに——」

× × ×

影から速射される手裏剣が、木々をなぎ倒す。それが七花の行く手を阻む。

× × ×

七実「敵が本当に一人なら……。そうですね、恐らくこの先の砂浜に七花は相手を誘導しているはずです」
とがめ「随分な自信だな。敵は真庭忍軍だぞ？」
　七実、はっきりと言う。
七実「忍者ごときに遅れを取る、虚刀流ではありません」
とがめ「頼もしい限りだが、今は真庭忍軍の者が、どうしてここにいるのかを考える方が圧倒的に優先事項だ！」
七実「それはそうですね。——とがめさん、尾行されていた可能性は本当にないのですか？　相手は忍者ですよ？」
とがめ「くどいな！　相手が忍者だからこそ、これ以上ないくらい警戒を払ったのだ。行き先を誰にも告げなかったのもそのためだ。……うむう、本当にどうして……」
七実「あの、とがめさんは、この島に一人で来られたんですか？」
とがめ「？　何を今更。真庭忍軍ではないが、軍所の人間も、単独行動が基本だ」
七実「では……どうやってこの島に来ましたか？」
とがめ「……船で来たに決まっておる」
七実「……自分で、船を漕いだのですか？」
とがめ「異なことを言う。そんなわけないだろう。私は頭脳労働が専門なのだ。そんな力があるように見え……え？」
七実「船頭が、いたのでは……？」
とがめ「え、いや、しかし……」
　青ざめる。
とがめ「まずい！　そいつは四季崎の刀を持っておる！」

□同・砂浜
　……に降り立つ影と七花。
　影はゆらりと振り返り、顔を見せる。
蝙蝠「お前よぉ、ひょっとしちゃって、この俺を追い詰めたつもりになってんじゃねえ

だろうな？　なぁ、虚刀流。逆だぜ逆！俺がお前をここまで誘導したんだっつーの！」

　考えている七花。

七花「……待て、待て」

蝙蝠「あ？」

七花「今日は客が多くて、頭が混乱しているんだ。そう一日に何人も来るな」

蝙蝠「はぁぁ!?　お前の都合なんか知るかよ！　俺は真庭忍軍十二頭領が一人……真庭蝙蝠様だ」

七花「真庭忍軍……？　ああ、さっき、忍者がどうとか聞いたな」

蝙蝠「その聞いてしまったのが、運の尽きだ。それさえなきゃ、見逃してやってもよかったんだがな。俺の目的は、あの女が喋る情報の方にあったんだから、よ」

七花「盗み聞きしてたのか？　趣味が悪いな」

蝙蝠「趣味がいいと、言ってくれ。キャハキャハ！」

七花「……とがめの後をつけて来たのか？」

蝙蝠「いいや、そんなこそこそした真似はしねえ。一緒に来たのよ。ぎーこらばったん、船を漕いでなあ。しんどかったぜえ？　あの女、えっらそうにふんぞり返って、手伝おうともしないんだからよ。どんな神経してんだってての、全く！」

七花M「本土の人間ってのは、どいつもこいつもこんなに喋るのか……」

蝙蝠「な、そう思うだろ!?」

七花「（生返事）はあ……」

蝙蝠「あ？　ノリの悪いやつ。ま、田舎者だしな、しゃーねえか。キャハキャハ！　さて、虚刀流……お前に恨みはねーけど、ぶっ殺ろさせてもらうぜ」

七花M「そういえば、実戦は初めてか……」

蝙蝠「怯えてんのか？」

七花「いや……見たところ、刀も持ってないようだし……」

蝙蝠「ああ、そういや刀を使わない剣士なん

だって？　剣術ってのは普通、刀を相手に想定するもんだからな。キャハキャハ！　馬鹿げた剣術もあったもんだぜ」
七花「別に、ただ俺が忍者についてよく知らないってことだ」
蝙蝠「安心しなよ、確かに俺は剣士じゃねえが……しかし、刀を使えないわけじゃない」
七花「……」
蝙蝠「ご要望にお応えして、取って置きの刀を、いきなし使ってやろうじゃねえか！」
蝙蝠、口に腕を入れる。
さすがに驚く七花。
七花「!?　なんだ!?」
蝙蝠「ごふぁがふぁげらげら！」
蝙蝠、ずるずると、体内から『絶刀・鉋』を取り出す。
感心する七花。
七花「人間って、そんなことが出来たのか……」
蝙蝠「聞いて驚け、見て驚け！　これが四季崎記紀が完成刑変体刀十二本が一本、絶刀『鉋』だ！」
七花「刀以上にあんたの身体に驚きだ……」
蝙蝠「キャハキャハ！　俺の通り名は『冥土の蝙蝠』！　冥土の土産をあまりにも大盤振る舞いする接待好きの性格ってわけだ」
七花「メイドの蝙蝠？　不思議と可愛い感じがするんだが……」
蝙蝠「わけわかんねえこと言ってんじゃねえよ！　それよりお前、何か感想はねえのか？　さっきあの女がさんざ語っていた、四季崎の刀だぜ？」
七花「ん……」
蝙蝠「あ？　なんかねーのかよ。黙りこくってよ」
七花「べとべとになっちゃってるのはいただけないな」
蝙蝠「はあ!?」
七花「貴重品なんだろ？　そんな風に持ち歩いていていいのかよ？」

蝙蝠「逆だ逆。肌身離さず身につけてねえと、
　こんな高価なもん不安でしょうがねえっつ
　ーの！」
　刀を披露する。
蝙蝠「それに、こいつには不思議な魅力があ
　るぜ……あの女は毒っつってたけど、こい
　つはとんだ百薬の長だ。所有すると、人を
　斬ってみたくなる――」
　蝙蝠、いきなり跳躍。
　大上段から振り下ろす！
蝙蝠「――報復絶刀！」
Ｔ「報復絶刀」
　七花、蝙蝠の初激をかわす。
　地を割る絶刀・鉋。
　蝙蝠、続けてなぎ払う。
　七花、鼻先で二激目、三激目をかわす。
七花「ふっ！」
　後ろ足で走り、間を取る。
　迎撃の姿勢を構える。
七花「虚刀流一の構え――鈴蘭」
　その構えを見据える蝙蝠。
蝙蝠「ふん、待ちの構えかよ！　んじゃ、こ
　ういうのはどう……よ！」
　と大きく跳躍。
七花「？」
蝙蝠「キャハーッ！」
　渾身の一撃を砂地に突き立てる。
　それが砂煙になる。
七花「！」
　蝙蝠を見失う七花。
　砂煙の中から蝙蝠の突撃。
蝙蝠「おぅら！　報復絶刀！」
　目つぶしに動じていない七花。
　弧を描くように攻撃に転じる。
七花「虚刀流、菊！」
　七花、背骨を支点に蝙蝠の刀をロックす
　る。
七花「（違和感）!?」
蝙蝠「ぐっ……てめえ！　俺が見えて……!?」
七花「騒ぎすぎだ。気配でわかるって」

　七花の間合いだ。

　手刀、足刀を繰り出す。

　ぎりぎりでかわし続ける蝙蝠。刀を持て余している。

蝙蝠「くっ！　はっ！　ああ、畜生！」

　転がって、距離を取る蝙蝠。息を切らせている。

蝙蝠「礼を言うぜ虚刀流、久し振りにびっくり仰天って奴を体験させてもらった。――いや、なるほど。手刀や足刀を駆使するわけか……種が知れりゃ、確かに剣士ではあるわな……」

　七花、構えたまま。

七花「あんたのびっくり人間振りほどじゃねえよ。――それに……」

蝙蝠「ん？」

七花「その『鉋』ほどでもな」

蝙蝠「！……さっきの一合で何か気付いたのか？」

七花「さっきのあれ、剣を受け止める技じゃねえんだ」

蝙蝠「は？」

七花「虚刀流・菊は相手の刀を真っ二つにする技だ」

蝙蝠「へ？」

七花「……その刀、絶対変だぞ」

蝙蝠「クク……キャハキャハ！　なにかと思えば！――変も変さ！　変でねえ方がおかしいっつーの！――この絶刀『鉋』はな、頑丈さに主眼を置いて作られた刀なんだよ！　刀なんざ消耗品だから、使ってりゃあ折れるし曲がるしよく斬れなくなっちまうよな。ところがこの『鉋』は違う。本当に折れないし、本当に曲がらないし、だからこそいつまでも……よく斬れるのさ」

七花「へえ……」

蝙蝠「こいつは直刀でありながら、何をしたって刃こぼれひとつ起きねえんだ。象が踏んでも壊れない日本刀、こいつは高く売れちゃうぜ。キャハキャハ！」

七花「……」
　得意げな蝙蝠。
蝙蝠「おれの調べた話じゃ、四季崎ってじじいは刀鍛冶でありながら陰陽道やら錬金術やらにも手を出していたらしいからな。怪しい術でも使ってんじゃねえの？」
七花「口から刀を取り出すお前の方が十二分に怪しいよ……」
蝙蝠「ところで……と、言うことはだぜ？虚刀流ってのは四季崎の刀には叶わないってことだよな……？」
七花「！」
蝙蝠「刀を折る技で、折れなかったんだからら！」
七花「……」
蝙蝠「虚刀流ときたら、相手の武器の破壊をもくろんじゃうなんてな。いやはやずば抜けてるよ！　しかしできれば、見て驚きかったところだよな!?」
七花「……安心しろよ」
　貫手で構える。
七花「虚刀流二の構え……水仙」
蝙蝠「ん……？　それでおれは何を安心しちゃえばいいんだ？　お前をさくっと殺せることか？」
七花「今度はきっちり、その絶刀『鉋』とやらをへし折ってや――」
とがめの声「ばかーっ！」
　息を上げたとがめが走って来た。慌てたので、蔦が絡んでいる。
　転ぶ。
とがめ「ぶっ！」
　砂まみれになっても構わず七花を怒鳴りつける。
とがめ「おっ……折ってどうする折って！そんなもの幕府に差し出したら、腹を切らされるわ！」
七花「あ……」
とがめ「そなたは人の話を何一つ聞いていなかったのか！」

七花「……別におれは、あんたの頼みごとを引き受けるとは言っていないのだが……」
とがめ「そういう問題ではないわ！　お前にはものの価値がわからないのか！　四季崎の刀をへし折るだなんて、普通に考えたら絶対にやらないことであろう！」
蝙蝠「その通りだな。お金になるもんをぶっ壊しちゃうだなんて、ものの価値がわかっちゃうおれには絶対にできねえ行為だよ、うんうん」
　やっと蝙蝠を見るとがめ。
とがめ「むっ……」
蝙蝠「ククク……とりあえずはこう言っておこうか。久し振りだな、子猫ちゃん」
　憤るとがめ。
とがめ「真庭……蝙蝠……！」
蝙蝠「そう怒るなよ。忍者ってのは裏切るもんだろうが……卑怯卑劣が売りなんだからよ……」
とがめ「貴様……！」
蝙蝠「その辺の話はあとでゆっくりさせてもらうぜ、奇策士さん……この虚刀流をぶっ殺してから、ゆっくりとな」
　と七花を見据える。
とがめ「七花、そいつを倒せ！」
　構える七花。
七花「とりあえず、あの『鉋』ってのには興味がわいたぜ……」
とがめ「いや、だから刀は壊すな……」
七花「わかったわかった。ついでに要望があるなら、全部言っておいてくれ。びしっと応えてやるから」
とがめ「で、では……そうだな、できるだけ派手な技を使ってくれ」
七花「は？」
とがめ「刀を手に入れた経緯は報告書にして提出しなければならぬからな。読者の興味をそそるような、格好いい技があるなら、ここはひとつ、それを頼む」
七花「（呆れ）……」

とがめ「繰り返すが、間違っても刀を破壊してはくれるな。そんなことをされては、第一話で話が終わってしまう」

七花「第一話って……本でも書くつもりかよ？」

とがめ「将来的にはそれもいいな。売れるぞ」

　蝙蝠を見る七花。

七花「（呆れ気味）んじゃ、派手な奴、見せてやるよ。待たせたな、蝙蝠……っておい」

　蝙蝠は刀を飲み込んでいる最中だった。

蝙蝠「あ……」

とがめ「ああっ！」

　蝙蝠、するすると刀を全部飲み込んでしまう。

蝙蝠「んぐんぐ、こふっ……と。いやいや、こっちこそ待たせたな。じゃあ、続きを始めちゃおうか、虚刀流」

とがめ「なに、仕舞っているんだ!?」

七花「それじゃあ勝負にならないだろうが……」

蝙蝠「ふむ、おれは剣士じゃねえからな……。変に刀に拘って、お前に倒されるのも忍びねえ。おっと、駄洒落になっちまったかい？」

七花「構わねえよ。どっちみち倒す」

蝙蝠「忍術で対抗していいなら、お前なんざ相手にならねえよ……経験が違う。実戦経験がな」

七花「……」

蝙蝠「ここまでのは接待だ……冥土の蝙蝠の、ただの悪い癖だったと思え。ここから先は、がちで行っちゃうぜ」

　激高するとがめ。

とがめ「ふざけるなー！　それは貴様の唾液で汚していいような代物ではないぞ！　吐き出せ！　今すぐに吐き出せ！」

蝙蝠「あーもう、うっせー子猫ちゃんだなおい。わかったよ――」

とがめ「なんだ、思いのほか素直……」

　空気を吸う蝙蝠。風船のように身体が膨

らんでいく。

七花「！」

手裏剣砲を発射する蝙蝠。

蝙蝠「はああーっ！」

水仙の構えのまま防御する七花。体中に手裏剣が刺さる。

七花「くっ……！」

砂煙で視界が塞がる。

砂煙が晴れる。あたりは手裏剣でズタズタにされている。

七花「つっ……痛ぇ………あれ？」

蝙蝠ととがめの姿が消えていた。

□同・森

……に逃げ込んでだ蝙蝠。脇に気絶したとがめを抱えている。

木々の間を跳躍しながら。

蝙蝠「ったくもう、やべえやべえ。あの小僧、超とんでもねえっての。――ま、何かあっちゃうとは思っていたがな、子猫ちゃん」

とがめ「（気絶）……」

×　　×　　×

ギリギリと縛り上げられる音で、とがめが目を覚ます。

とがめ「ん……」

木の幹に縛り付けられていた。

とがめ「！　なんだこれは!?」

とがめを縛り上げている蝙蝠。

蝙蝠「おっと、目を覚ましたか」

とがめ「あいつは!?」

蝙蝠「キャハキャハ！　安心しな、殺るのはこれからだよ」

とがめ「（怒り）蝙蝠……」

蝙蝠「あんた、確かに目の付け所は良かったみたいだけど、甘いよ。あいつ、戦闘向きかもしれねえが、戦場向きじゃねえぜ」

とがめ「ふん、逃げ出した臆病者が……」

蝙蝠「おいおいおいおい、何ほざいてんだ。力に対して策で挑むのが、賢き者のすることだなあ、奇策士さん？」

とがめ「きさまのは、弱き者を嬲っているだけだ。わたしの奇策は、弱き者が強き者に噛みつくために考え出す、命と魂を削るやり方だ。一緒にするな、下種が」
蝙蝠「奇策士ってのは屁理屈も上手いもんんだ。それにしてもあの台詞はねえだろ？」
とがめ「は？」
蝙蝠「『わたしに惚れていいぞ』っておいおい、すげえこと言ってるよな？　びっくりして思わず手裏剣砲撃っちまったじゃねえか」
とがめ「あの砲撃は、思わず――なのか？」
蝙蝠「恥ずかしさのあまり、堪えきれなくてな」
とがめ「（赤面）うう……」
蝙蝠「甘酸っぱいねえ。おれも言って欲しかったねえ、そういうこと。――ま、欲しい情報は全部聞いたしな。ちょうど良かったよ」
とがめ「くっ！……さっさと殺せ！」
蝙蝠「潔い振りなんかしてんじゃねーよ、子猫ちゃん。……そう言いながら、腹の中では俺を出し抜く方法をいろいろ考えてんだろ？」
とがめ「……」
蝙蝠「あんたの腹の中は、俺以上に混沌としてるぜ」
とがめ「ふん……」
蝙蝠「安心しろ。殺したりしねえよ。さっきの手裏剣砲だって、わざと外してやったんだぜ。キャハキャハ！」
とがめ「きさまは加減を知るのだな。かすったりしようものなら、わたしは絶対に死んでいたぞ。わたしのひ弱さを、きさまは知らない」
蝙蝠「自慢するみたいに言うことじゃねーっつーの！　戻ったら拷問すんだからよ、少しは頑張ってくれよな」
睨むとがめ。
とがめ「……」

蝙蝠「残りの刀の在処だって、全く情報が無いわけじゃあねえんだろ？　そいつを聞き出さなきゃなあ」
とがめ「……」
蝙蝠「……最後に一応誘っといてやるぜ。あんた、幕府なんざ裏切って、おれらと組んじゃわないか？　分け前はちゃんと計算してやる」
とがめ「断る。金で動くやつは信用できない」
蝙蝠、とがめの顔を触りながら。
蝙蝠「裏切ったことを怒ってんのか？　忍者を信用しちゃう方がおかしいってよ。あ、さて……」
蝙蝠、ごきごきと身体を鳴らし、変身を開始する。
とがめ「!?」
蝙蝠、変身しながら。
蝙蝠「いろいろ考えたけど、実際あんたじゃ人質にならないわけよ。そこでこういうのはどうだ？……俺の姿が変わっていたら？それがあんたの姿だったら……？」
蝙蝠からとがめへの変身が終わる。
身体のサイズが合わなくなるので、着物が落ちる。
蝙蝠「さすがの虚刀流も油断するだろうぜ？」
自分と同じ姿（裸）に、嫌悪するとがめ。
とがめ「ひ……」
声もとがめの物に変わる。
蝙蝠「俺の能力、知らないわけじゃないだろ？　あんたの命令で『鉋』を奪ってきたわけだからな」
とがめ「くっ……」
蝙蝠、口からとがめの物と同じ着物を取り出し、羽織る。
蝙蝠「虚刀流をぶっ殺したら、今度はその虚刀流に化けて、お姉ちゃんを殺すとするか。悪いけど、あんたはそれまでここで待っといてくれ」
退場しようと踵を返す蝙蝠。
とがめ「くっ、待てっ！」

蝙蝠「（背）俺が裏切ったのは金のためだが、そうでなくとも、あんたのどんな人間かを最初から知っていりゃあ、そもそも組みさえしなかったろうよ。さっき誘ってやったのも、あんたと組んで――」

とがめを見る。

蝙蝠「――もう一度裏切ってやるためだ」

とがめ「……」

蝙蝠「（蝙蝠の声で）あんたを好きになる奴なんざ、この世にはいない」

× × ×

森の中。

足跡を見る七花。

辺りを見渡す。

七花「おっかしいな……」

□同・水汲み場

にやって来る七花。

七花「あいつら、どこへ行ったんだ……」

わき水を見る七花。

七花「……」

× × ×

――フラッシュ

水を飲もうとするとがめ。

× × ×

佇む七花。

七花「……島を出る……か。……今更……」

呟く。

七花「（本意ではなく）面倒臭い……」

× × ×

身を潜めている蝙蝠（とがめの姿）。

佇んでいる七花を見ている。

蝙蝠M「たしかに、四季崎の変体刀にとって、虚刀流は最も嫌な相手だ。この殺せる機会を生かさせてもらわねえとな……」

七花の無防備な様を見る。

蝙蝠M「……確実に殺せる……惜しいな……。ま、あの女に目を付けられたことが既に、ついてなかったわけだが……。行くか……設定は、拉致されたものの、命からがら自

力で脱出してきた――有無を言わさず抱きついて……そして殺す」

　駆け出す蝙蝠。

七花「！」

　振り返る七花。

　振り返る姿勢から、後方回し蹴りに。

七花「虚刀流、牡丹！」

　蝙蝠の腹に蹴りがめり込む。

蝙蝠「!?　がっ……!?」

蝙蝠M「え……？　なんで……？」

蝙蝠「ぐぼっ！」

　と鉋を刃先から吐き出す。

蝙蝠M「何が違った……!?　変装……いや、俺のこれは変装なんかじゃねえ……変身は完璧だろ!?」

　のたうって、苦悶する蝙蝠。

蝙蝠「がはっ、げほっ！」

七花「……お、よく見ればとがめじゃねえか？」

蝙蝠「……！」

蝙蝠M「こいつ！　誰とわからずに技を出したのか!?」

　七花、落ちている鉋を見る。

七花「あれ……？　ってえことは、お前蝙蝠の方か？」

蝙蝠M「方!?」

蝙蝠「おま……お前！　相手が誰だか認識出来てないのか!?」

七花「や、姉ちゃん以外の人間なんて、今日初めて見たようなものだからな……すぐには見分けがつかん」

蝙蝠「（苦悶）な、んだと……」

蝙蝠「変装以前の問題だ！　こいつ……端から人の区別がついてなかっただと!?」

七花「やべえな、あいつの方だったら死んでたよな……」

蝙蝠「ぐっ……」

　鉋を拾う七花。

七花「一本、蒐集ってところか……」

蝙蝠「（苦悶）い……田舎者どころの話じゃねえ……動物が……」
　見据える七花。
七花「……。――派手な技と言われていたが、地味になってしまったな……」
蝙蝠「ぐっ……お前……お前はそんなに、この女の役に立ちたいのか？」
七花「は？」
　蝙蝠、自分を指して。
蝙蝠「この女に利用されたいのかと聞いているんだ……こんな女の言うことをきいたところで、いいことなんか、一つもないぞ……」
七花「利用……？」
蝙蝠「お前は、こいつの話を聞いて、おかしいとは思わなかったのか？　どうして幕府が今更、四季崎の刀を集めるのか？」
七花「それは……反乱を怖れて、だっけ？」
蝙蝠「それは理由としては正しいだろう。正しいだろうぜ！　だが……少し聞こえがよ過ぎるな。そうは思わなかったか？」
七花「（肯定）……」
蝙蝠「今の幕府は、旧将軍ほど四季崎の刀の幻想にとらわれちゃいないさ……、もっと現実的だ。しょせん、今回の刀集めなんてのはな……この女の出世のための手段に過ぎないんだよ」
　×　　×　　×
　森に張り付けにされているとがめ。
　恨みの表情。
とがめ「……」
　×　　×　　×
蝙蝠「奇策士とがめ――軍所総監督どのの、手柄話のひとつとするために、行なわれていることに過ぎないんだ」
七花「出世とかは、俺にはよくわからん……。軍所総監督って時点で、そこそこ偉いんじゃないのか？」
蝙蝠「そんなそこそこじゃ、この女は満足しねえんだよ……上り詰めないとな。疑うっ

てことを知らないのか？　この若さの女が一組織の頂点に立つまでに、汚い真似をしてねえわけがないだろうが。実力だけが物を言う世界なんて、そうそうねえんだよ!?」

七花「……」

蝙蝠「初めて会ったとき、おれはぞっとしたもんだぜ？　この女の眼に宿っていた野心にな。何を犠牲にしても誰を犠牲にしても構わないって感じだった……真庭忍軍のことも利用する気満々だった。恐るべき暗殺専門の忍者集団、真庭忍軍をだぜ？　ぶっとんでるっつーの……」

七花「……」

蝙蝠「お前も利用されるだけだ……虚刀流！」

×　×　×

とがめM「こんなことで終わってしまうのか……!?　こんな所で終わってしまうのか!?」

×　×　×

七花「……で、あんたは、裏切られる前に、裏切ったのか？」

蝙蝠「そうさ。こんな女、付いてけるわけねえだろ？　この女の最終目標ってどこだと思う？……次代将軍の御側人だよ」

七花「え……？」

蝙蝠「現将軍はもう歳だ、遠からず引退するだろうよ……そうなったとき、まだ若い新将軍の御側人であるということが、どういうことか、わかるよな」

七花「天下……」

×　×　×

とがめM「名を捨て、家を捨て、全てを捨てて……こんな名も無き島で終わってしまうのか!?」

×　×　×

七花「……それは何も、責められるようなことではないだろう？　まあ、利用されてたあんたらにしてみりゃ、確かにいい気分じゃないだろうけどさ……」

蝙蝠「利用されるのは別にいいさ。利用し、利用されるのが世の常だ。ただな、利用さ

れる理由が、この場合は問題なんだよ！」
七花「……言っとくけどおれは頭が悪いから、そんな言い方じゃ何も伝わらないぞ……」
蝙蝠「けっ……。この女はな……先の大乱の首謀者、飛騨鷹比等の娘だ！」
七花「！」

×　×　×

——フラッシュ
とがめ「かの反逆者達の心意気そのものまでを、誰が否定出来よう……」
七花「……」

×　×　×

蝙蝠「世が世なら、一国一城のお姫様ってわけだ……」

×　×　×

とがめの瞳には炎が見える。
とがめM「もう見えていた。もう、手の届く位置だったのに……」

×　×　×

蝙蝠「そんな女が、なりふり構わず、出世を狙ってんだ。時代将軍の御側人を狙ってるんだ。どういうことかわかるよな!?」

×　×　×

とがめM「とうさまの思念を！　とうさまの無念を！」

×　×　×

七花M「あいつは……自分の父親の仇に、刀集めを、頼もうとしていたのか……!?」
蝙蝠「何を企んでるかなんて、明瞭だろう——復讐だ！」

×　×　×

張り付けにされているとがめ。
無念の形相。
とがめM「とうさまの恨みを晴らすことが出来たのに……！」

×　×　×

七花「（ショック）……」
肉体の変形を始める蝙蝠。七花へ変わろうとしている。
蝙蝠「一族を根絶やしにされた意趣返しだよ

な！　キャハキャハ！　何せあの女、てめえの家族が殺されていくさまを、その目で見てたんだってよ！」

×　×　×

──過去・炎の中の子供とがめ。

一族の屍を前にして慟哭。

とがめ「ああーっ！」

髪の色が変わる。

×　×　×

とがめM「いくらそれしかなかったとはいえ……父様を殺した張本人に……そうでなくても、その息子なんかに頼るなんて……」

×　×　×

七花「（自分に）……俺だって、仇の息子だ……」

×　×　×

張り付けにされているとがめ。

とがめM「……やはり、虚刀流に頼ろうとしたことが失敗だった！」

×　×　×

七花「（ショック）……」

七花の姿に変わっていく蝙蝠。

蝙蝠「賊軍出身の獅子心中の虫けらによ……裏切りがどうとか、卑怯がどうとか、言われたくねえっての。キャハキャハ！」

七花の姿に変わった蝙蝠。声は蝙蝠のまま。

身体の動きを確かめる。

蝙蝠「いい身体だ、参考にさせてもらったぜ。筋力から腕力から脚力から、全く互角。おっと、手裏剣砲で腕と脚をかたっぽずつ痛めてるから、俺のほうがちっとばっかし有利って感じ？」

七花「……言っとくけど、この程度、今はもう、痛くもねえ」

蝙蝠「だろうよ。だから、まあ互角だとして、グーとグーとのあいこだとして！」

『鉋』を拾う蝙蝠。

蝙蝠「これで俺が、強いグーだ！」

七花「……なあ、そのとがめの秘密を知って

いるのは他にいるのか？」

蝙蝠「は？　こんなとびっきりの情報、簡単に漏らすかよ」

七花「じゃあ、あんたをきっちり倒せば、それでいいんだな……」

蝙蝠「あ？　なんで俺に対して士気高揚しちゃってんの？」

　静かに構える七花。

七花「……虚刀流七代目当主、鑢七花――推して参る」

蝙蝠「キャハーッ！　かっこつけてんじゃねえよ！」

　蝙蝠、跳躍！

七花「来い！　とびっきり派手なのを決めてやる。最終奥義！」

　蝙蝠、大上段に構え、斬り掛かる！

蝙蝠「だだだだだだだだっ！　抱腹絶倒！」

　大上段からの一撃が、振り下ろされ……ない！

　握ったはずの『鉋』が、手からすっぽり抜けて中空に舞っていた。

　蝙蝠、自由落下のまま。

蝙蝠「な、なんで!?」

七花「……虚刀流の人間ってのは代々、剣術の才能ってやつがこれっぽちもねえんだよ。――刀を使わない剣士なんじゃない。刀を使えない剣士なんだ！」

蝙蝠「ええーっ!?」

　落下するしかない蝙蝠。

蝙蝠「あ……くっ……この俺が……！」

　構える七花。

七花「ちなみに、最終奥義とか言ったけどさ。それはなんでかってえと……これは、俺が昨日考えたばかりの必殺技だからだ！」

　七つの奥義をたたき込む！

七花「必殺の奥義を、一気に七つ食らわせ、一瞬で相手を八つ裂きにするところから……とりあえず、こう名付けてみた。――虚刀流『七花八裂』！」

　鏡花水月！

花鳥風月！
百花繚乱！
柳緑花紅！
飛花落葉！
錦上添花！
落花狼藉！

T「七花八裂」

炸裂!!　パカーン！――散る蝙蝠。

□同・森

とがめのアップから。猿ぐつわのまま。

とがめM「……なんという有様、それでも武門の娘か……。これ以上、恥をさらす前に……自分で……」

張り付けのままのとがめ。激しくもがいたのか、おかしな縛り方に変わって、逆さ張り付けになっていた。

とがめM「……ふっ、ふふふ、ふふふふふ！　ばかなことを!?　ほどけずゆるまないのは、こんな縄じゃない。折れず曲がらずよく斬れるのは、わたしの奇策だ！　これしきの逆境など！　うがーっ！」

と、縄からぬけようともがく。

七花が現れる。

とがめ「！」

七花「おっ、ここに居たか」

びっくり仰天のとがめ。動転する。

とがめ「むーっ、むーっ！」

七花「あいつが言ってたのは、そういう目のことか……」

とがめ「むーっ、むーっ！」

笑むとがめ。

七花「おれには、きらきら光って、ずいぶんと格好良く見えるけどな」

とがめ「!?」

とがめ、激しく赤面。

とがめ「むーっ、むーっ！」

刀を見せる七花。

七花「……とりあえず、まずは一本だ」

動転しながら、心底驚くとがめ。

とがめ「!?　むー、むー!?」

とがめＭ「ん？　なんだろう、その……これから先があるかのような物言いは……？」

　七花、とがめの猿ぐつわを外す。

とがめ「ぷはっ！……七花、蝙蝠は!?」

七花「ああ、かっこよくやっつけてやったよ。見損ねたな」

とがめ「え……あ……（強がる）ああ、残念だ」

　縄をほどく七花。

七花「勘違いしないでくれよな。あんたのためなんだからな」

とがめ「む？」

七花「別に俺は金に目がくらんだわけでもないし、四季崎の刀の毒が回ったわけでもないし、まして幕府のためだなんてこれっぽっちも思っちゃいねえ。――ただ、あんたのためにしたくなっただけなんだからな」

とがめ「え……？」

　微笑む七花。

七花「俺はあんたに、惚れることにしたよ」

　驚いて、紅潮するとがめ。

とがめ「お……おお……！」

□同・海岸【夕】

　七花ととがめを乗せた漕ぎ船が海へ出る。

　見送っている七実。

　×　×　×

――回想

　旅立つ直前。

　海岸で七実は、とがめと話す。

七実「とがめさん」

とがめ「？」

七実「今回の話ですが……私は賛成です」

とがめ「おおそうか、てっきりそなたは反対なのだと」

七実「そうですね……いえ、正直あなたの話自体は、私にとってはどうでもよいのです。ただ、どんな理由であれ、あの子が外の世界に出ることには、私は賛成なのです。―

―この島に渡ってから二十年……あの子が積んできた修行が、研鑽してきた技術が、何の実りも結ばないなんて、そんなの、切なすぎますから」

　情が沸くとがめ。

とがめ「………。（毅然と）言っておくが七実、そんな簡単な道程にはならぬぞ。真庭忍軍や錆白兵はもちろん、未だ所在の知れぬ刀を所有しているのは、どんな化け物か、鬼か、蛇か……。私はそういう戦いへ弟君を連れだそうと言うのだ」

　七実、くすりと笑む。

七実「随分と、お優しいのですね」

とがめ「？」

七実「とがめさんは七花のことを本当に心配してくれている。そんなあなたなら、お願いするまでもなく、安心して弟を任せられます」

とがめ「……っ！」

　と赤面するとがめ。

とがめ「私は――！」

□海上【夕】

　海を行く漕ぎ船。

とがめM「――私はそのように優しい女ではない」

七花「……」

　漕いでいる七花。針路を見据えている。

　とがめ、咳払い。

とがめ「ううん。……鑢七花、お前に指示を出しておくことが四つある」

七花「？　四つか、聞こう」

とがめ「まずさっき言ったことだ。刀は折るな――」

七花「了解。俺は刀を守ろう。二つ目は？」

とがめ「私を守れ。四季崎の刀集めが目的とは言っても、私が死んでは何にもならん――」

七花「了解。俺はあんたを守ろう。三つ目は？」

とがめ「そなた自身を守れ。――これはそなたをおもんぱかって言ってるわけではないぞ。そなたは四季崎の刀を十二本集めるまで、死ぬことを許されぬ身だ。たとえ一本の刀を手に入れたとえ、その際に重傷を負っているようでは話にならぬ」
七花「了解。俺は俺自身を守ろう。四つ目は？」
とがめ「そなた自信を守れ」
　ぷいっと背を向け、歩き出すとがめ。
とがめ「これは、まあ……そなたをおもんぱかって言っているわけだ」
七花「……」
とがめ「死ぬな。厳しい旅程にはなるが、決して死ぬな。――出来るな？　出来んとは言わせんぞ。はやく了解と言え」
七花「……極めて了解。俺は全てを守ろう」
七花「それで、まずはどうする？」
とがめ「――まあ、焦るな。町に着いたらまずはそなたに服を買ってやる」
七花「わかった。愛してるぜ」
とがめ「うむ、私のことを、好きなだけ愛せ」

N「――人を知らぬ男と、心を無くした女。そうして二人は旅に出たのです。行き先も行く末も知れぬ、刀集めの旅に――」
　紗の向こうでほくそ笑む否定姫。
　ギラリと振り返る真庭忍軍の忍者たち。
　誰もいなくなっている、不承島の壊れた小屋。
N「――待ち受けるのは鬼か蛇か。――刀語、今月今宵のお楽しみはここまでにございます」

□不承島・海岸【夕】
　佇んでいる七実。
七実「だけど……あの子、あんなに弱いのに大丈夫かしら？」

【＃01・了――現状156枚】